第 17 回 北海道歯科衛生士会学術大会プログラム

10:00～10:05 開会挨拶　　一般社団法人北海道歯科衛生士会 会長 末永智美

10:05～11:05 口演発表　　座長 北海道歯科衛生士会 理事 馬場めぐみ（研修担当）

1.「訪問歯科診療における ICT を利用したおたるワンチームの試み」
角田裕子（小樽支部）　北海道歯科衛生士会小樽支部

2.「模擬患者実習における症例検討について」
川口一紗（小樽支部） 一般社団法人小樽市歯科医師会立 小樽歯科衛生士専門学校

3.「模擬患者実習における症例検討について」
安斉紗和（3 年）岩井くるみ（3 年）戸田有希菜（3 年）（学生部）
北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校

4.「歯科衛生士キャリアアップの一例 摂食嚥下障害に対応する歯科衛生士を目指した活動報告」
山口美帆（札幌支部） 社会医療法人豊生会 夕張市立診療所

11:05～11:25 災害時の歯科衛生士の活動について　　北海道歯科衛生士会 理事 川平景子

11:25～11:30 北海道歯科衛生士会からのお知らせ

11:30～12:30 昼休み

12:30～14:30 特別講演

演題「歯科衛生士が担うがん治療の鍵」

独立行政法人国立病院機構 北海道がんセンター

歯科口腔外科医長 秦　浩 信 先生

14:30～　閉会挨拶 アンケートのお願い

歯科衛生士が担うがん治療の鍵

独立行政法人国立病院機構　北海道がんセンター

歯科口腔外科　秦　浩信　先生

がん薬物療法が進歩し、通院治療が一般化する中で、がん治療を受けている患者が一般歯科医院を訪れる機会が増えてきています。また、終末期においても自宅での看取りを希望される患者やご家族も多くなってきています。通院および在宅における、口腔機能管理の重要性がますます高まる中、歯科衛生士の役割も一層拡大しています。

骨吸収抑制薬の副作用である、薬剤関連顎骨壊死(MRONJ)への対応は歯科界の抱える大きな課題です。がん患者の MRONJ リスクは、骨粗鬆症患者の MRONJ リスクの数十倍です。骨吸収抑制薬を使用しているがん患者の歯周病をコントロールすることは、単に歯を守ることだけではなく、MRONJ の予防に繋がります。また MRONJ 発生後も壊死骨周囲が不衛生である場合、顎骨周囲炎となり開口障害や疼痛増悪の原因となります。そのため壊死骨の清掃管理も歯科衛生士には求められています。さらに終末期における口腔衛生管理の実践は命の尊厳を守り、穏やかな最期を過ごすための支援になります。つまり歯科衛生士は歯周管理、口腔衛生管理を通じてがん患者の QOL を守る鍵を担っています。

本講演では、がん患者の口腔内環境を整え、がん治療中に良好な口腔衛生状態を維持することの意義を深く理解していただきたいと考えています。そして、患者さんの生涯に寄り添い、勇気を与える歯科衛生士が一人でも多く増えることを期待しています。口腔から全身の健康を支える歯科衛生士の仕事に誇りを持ち、明日からの診療に取り組んでいただくきっかけとなれば幸いです。

ご略歴

1999 年　北海道大学歯学研究科卒業

1999 年　北海道大学口腔外科第一講座（現口腔診断内科）　入局

2003 年　北海道大学大学院歯学研究科　博士課程　修了

2003 年　静岡県立静岡がんセンター　ジュニアレジデント

2007 年　北海道大大学院歯学研究科口腔診断内科　助教

2016 年　国立病院機構　北海道がんセンター　歯科口腔外科医長

資格

博士（歯学）

日本口腔内科学会専門医/指導医

日本口腔外科学会専門医/指導医

日本がん治療認定医機構がん治療認定医

日本口腔腫瘍学会口腔がん専門医

訪問歯科診療におけるICTを利用したおたるワンチームの試み

○角田裕子[1)4)]　上林由加利[2)4)]　山口大樹[3)4)]

[1)] 北海道歯科衛生士会小樽支部　[2)] 医療法人社団一視同人会はびりす
[3)] 一般社団法人小樽市歯科医師会　[4)] おたる地域包括ビジョン協議会・ICT委員会

【キーワード】
おたる地域包括ビジョン協議会、ICT委員会、訪問歯科診療、多職種連携

【目的】

小樽市では平成29年度より「おたるワンチーム」というICTを用いた多職種連携在宅医療を行うシステムを運用している。その特徴は医療関係者だけでなく患者家族も参加している点である。今回、ICT委員の歯科衛生士の事前調査から訪問歯科診療の連携に加わりICTが効果的に利用された症例を報告する。

【症例・経過】

78歳男性。肝細胞癌脳転移により脳の手術をした為ADL低下、令和3年春頃から左顔面麻痺・嚥下障害が進行した為、担当ケアマネジャーよりICT委員会を介して訪問歯科診療の申し込みがあった。ICT委員の歯科衛生士による事前調査をもとに食事状況などをワンチームに投稿してもらい、訪問歯科診療前に事前ミーテイングを行った。訪問診療後も食事摂取時の状況を投稿してもらうことで指導内容が実践できているか確認できた。なお、本報告の発表について患者家族から文章による同意を得ている。

【結果および考察】

小樽市は高齢化率41.65%と北海道内主要都市の中では高齢化率が一番高い市となっている。この高齢化に対応すべく、在宅医療連携推進事業の一環として小樽市医師会が中心となっておたる地域包括ビジョン協議会が構成された。その取り組みの一つに医療と介護が連携してICTの活用等により効果的に情報を共有し、在宅療養患者を支えるしくみとして「おたるワンチーム」が推進されている。患者を中心としたページ構成となっており、関係から医療介護情報のみならず、医療従事者や患者家族も参加してＳＮＳのようにコミュニケーションをとることができるのがワンチームの特徴となっている。

今回の症例は「おたるワンチーム」を介することで以下の利点があった。

① 担当ケアマネジャーは訪問歯科診療依頼前にICT委員の歯科衛生士に事前調査をすることでご家族の希望が訪問歯科診療で可能か確信できた。
② 事前に主治医やケアマネジャーの投稿を確認して患者情報をスムースに得る事ができた。
③ 患者を中心としたネットワークの為、多職種の方々や家族の投稿で患者やご家族を支えたい気持ちが一つになれる事が実感でき、「おたるワンチーム」を介した訪問歯科診療の重要性を認識できた。

【結論】

「おたるワンチーム」というICTを利用した患者情報共有システムを使った訪問歯科診療症例を報告した。今後もこのシステムを利用した訪問歯科診療を介して更なる多職種連携を進めていきたい。

【引用文献】

NTTDATA　おたる地域包括ビジョン協議会―おたるワンチームの取り組みのご紹介―　2019年

北海道歯科衛生士養成機関における学生の生活実態調査

○川口一紗[1)] 笹山美香[1)] 荒川久悦[2)] 市川智恵[3)] 岡橋智恵[4)] 渡邊恵里[5)] 川平景子[6)]
田村智美[7)] 中原奈緒美[8)] 中村麻希[9)] 仁井奈美[10)] 松本崇嗣[11)]
小樽歯科衛生士専門学校[1)] 旭川歯科学院専門学校[2)] 札幌歯科学院専門学校[3)] 北海道医療大学歯科学部附属歯科衛生士専門学校[4)] 函館歯科衛生士専門学校[5)] 札幌医療技術福祉歯科専門学校[6)] オホーツク社会福祉専門学校[7)] 帯広コア専門学校[8)] 北海道歯科衛生士専門学校[9)] 札幌看護医療専門学校[10)] 吉田学園医療歯科専門学校[11)]

【キーワード】アルバイト　生活習慣　学習習慣　信頼関係

【目的】

日本学生支援機構における「令和４年度の学生生活調査結果」によると、家庭の年間平均収入額が減少しているにも関わらず、学生生活費は増加している。そのため学生のアルバイト従事者や奨学金受給者の割合が増加しているという。この傾向は北海道における歯科衛生士養成機関でも同じだと思われる。そこで今回、学生の経済状況、生活習慣、学習習慣を調査し、その実態を明らかにすることで今後の教育の充実に活用することとした。

【対象および方法】

北海道歯科衛生士養成機関 11 校の第 1 学年から第 3 学年 905 人を対象とし、対象者に質問紙調査を Google フォーム上にて実施した。質問項目は生活状況（23 項目）、経済状況（13 項目）、学習習慣（16 項目）SNS の利用状況（3 項目）、その他（7 項目）である。

【結果および考察】

回答人数は 713 人であった（回答率は 78.7%）。学生の経済状況について奨学金制度の利用は 55.3%、アルバイトについては 81.6%が行っている。学生の年間収入源（複数回答）は「アルバイト」80.5%、「家庭からの給付」44%「奨学金」29.5%であった。アルバイトの目的や使い道は「娯楽費」「食費」「通学費」の順に多かった。生活習慣の朝食を「毎日食べる」62.6%、昼食は「毎日食べる」92.3%、夕食は「毎日食べる」80.2%であった。平均睡眠時間は「5～6 時間」47%、「6～7 時間」は 32.3%であり睡眠に対して 58.7%が不満を感じていた。SNS について 94.8%が利用し、その半数が 1 日 3 時間以上使用している。学習習慣については、平日の学習は「しない」56.7%、土日の学習も「しない」56.7%であった。しかし、試験前には平日「3 時間以上」30.9%、土日は「2～4 時間」32.1%であった。また、成績については「なるべく良い成績をとるようにしている」と 68.1%が回答している。藤原氏らの研究では朝食の有無、十分な睡眠、SNS の利用が学習成績に影響を与えることが示唆されており、生活習慣の重要性を踏まえた学生指導が必要と考えられる。

【結論】

多くの学生がアルバイトをしており、試験前以外は自主学習をしない学生が多くいるが、アルバイトが生活に必要な学生も一定数存在することがわかった。学生の生活背景から、学習習慣を定着させるための働きかけや、食事や睡眠の確保が学業に与える影響についての理解も促す必要があると思われる。また、学生だけでなく、教員側も学生に抱える背景について理解を深めることも必要であると考える。充実した学生生活を送りながら、歯科衛生士免許取得を目指すためには、学生に寄り添う支援が重要であり、共に成長し合える環境を構築し学生の可能性を引き出していきたい。

【引用文献】

1) 独立行政法人　日本学生支援機構：令和４年度学生生活調査結果　p4～11
2) 藤原　寛：学業成績と脂質栄養との関連.J.Lipid Nutr.Vol.20,No.1,p35-46,2011
3) 楚　天舒、岸本　裕歩:大学生における生活習慣と学業成績との関連.健康科学.42,p27-38,2020
4) 長　広美、柳瀬　公：日本の大学生の SNS 利用と学業成績との関連について：社会情報学,第 8 巻 3 号,2020

模擬患者実習における症例検討について

〇安斉紗和　〇岩井くるみ　〇戸田有希菜　岡橋智恵　秋元奈美
大山静江　千葉利代　山形摩紗
北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校

【キーワード】歯科衛生過程　模擬患者　学生主体

【目的】　本校では卒業前に歯科衛生学実習の一環として模擬患者（以下 SP：Simulated Patient）を対象とした歯科衛生過程を展開している。歯科衛生過程とは歯科衛生業務を展開するための論理的思考ツールである。今回はこの SP 実習の実施報告と実習をとおして得た学びについて報告する。

【対象および方法】　SP 実習は 3 年生の前期・後期に行われ、SP1 名に対し学生 3 人が 1 グループとして歯科衛生過程を実践する学生主体の実習である。実習はオリエンテーション後にグループ内で打合せ後に SP のアセスメントを実施する。実習後に全体カンファレンスを行いグループワークにてアセスメントで得た患者情報の分類・分析、歯科衛生診断後に歯科衛生計画を立案する。介入実習は 2 回あり自分達の歯科衛生計画に基づき口腔内診査・唾液検査や口腔健康管理指導を行う。その後は歯科衛生過程の手順に基づき実施記録と評価、計画修正を行い最終的には症例発表を行う。

【結果および考察】　担当 SP は K さん。60 歳代の女性。事前のグループワークでは SP への指導内容を確認しセルフケアを実践してもらえるように媒体製作を考えていた。実際のアセスメント後には下顎前歯部叢生による清掃不良、歯肉退縮、部分床義歯をあまり装着していないことが判明したため優先順位は①口腔健康のための行動：ブラッシング方法について②口腔健康管理の知識：歯周病について③硬組織の健康状態：義歯の取扱いとした。アセスメント時に本人が「指導内容を忘れやすい」と言っていたためブラッシング方法と補助清掃用具の使用方法を記入した指導媒体の準備をした。1 回目の介入では、下顎前歯部叢生部分の隣接面プラークが特に除去されていなかったため、顎模型を用いて 1 歯ずつの縦磨き法の指導を行うとともに作製した媒体を使用しながら知識と技術の理解度を確認した。口腔内の改善には補助清掃用具の使用方法と頻度が課題であると考え、2 回目の介入では補助清掃用具の指導を中心に行い、SP 実習終了後のセルフケア継続に繋がるような媒体準備が必要だと考えている。最終の介入実習が 9 月実施のため、現時点での考察となるが、SP 本人は指導にも積極的に応えてくれることから媒体を活用した指導によって知識と技術の理解が深まり定着するのではないかと思われる。

【結論】歯科衛生士になる前に SP 実習を行うことで歯科衛生士として働く時のスキルを高める事ができ、患者とのコミュニケーションの重要性や介入が達成された時の達成感を実感することができる。卒業後も歯科衛生過程という論理的ツールを活用していきたい。

【引用文献】１）高阪利美　他：歯科予防処置論・歯科保健指導論,医歯薬出版株式会社,東京,2023

歯科衛生士キャリアアップの一例
摂食嚥下障害に対応する歯科衛生士を目指した活動報告

○山口美帆

社会医療法人豊生会　夕張市立診療所

【キーワード】摂食嚥下障害　歯科衛生士キャリアアップ　地域医療

【目的】

超高齢化社会における地域のケアシステムの構築が進むにつれて,歯科衛生士の職域が診療室から地域に広がるとともに,多職種との連携が必要となり,歯科衛生士による全身管理,医科歯科連携および口腔機能管理等の対応が必要になってきた.[1)]臨床の活動・活躍の場が広がる一方,専門医療職としての資質向上が課題であるとも言われている.[2)]

自身が勤務する地域においては高齢化率の上昇や在宅療養者の増加に伴い,摂食嚥下に対する相談が増えていった.そこで,地域のニーズや自身のキャリアアップのために摂食嚥下障害に対応する歯科衛生士になるべく行動した 6 年間の活動と今後の展望について報告する.

【対象および方法】

2017 年 4 月から 2018 年 3 月まで,日本歯科大学東京短期大学専攻科口腔リハビリテーション学専攻(現日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック歯科衛生士レジデント)在学中および、2018 年 4 月から 2023 年 3 月まで,総合病院リハビリ科に在籍し摂食嚥下リハビリテーション専任歯科衛生士としての活動した 6 年間を対象とする.

【結果および考察】

在学中は,リハビリテーション医学・医療の概念、摂食嚥下機能のメカニズム,ライフサイクルにおける摂食嚥下障害の特徴,摂食嚥下障害の原因,発達期における摂食嚥下障害,地域連携,摂食嚥下障害者の QOL,摂食嚥下障害の評価,摂食嚥下障害への対応,摂食嚥下障害と栄養(評価・嚥下調整食・経管栄養),全身管理の基礎知識,誤嚥性肺炎と口腔衛生管理,周術期口腔管理,歯科訪問診療,歯科衛生ケアプロセス(歯科衛生過程)に基づく口腔リハビリテーションなどの専門知識を獲得し,臨床研修で実践することができた.

総合病院リハビリ科では,摂食嚥下リハビリ専任歯科衛生士として,入院患者に対する摂食嚥下機能スクリーニング検査,適切な食事形態や食事量・水分摂取方法の提案,VFVE 検査の準備補助,退院時指導,各種院内勉強会の実施などを行うことで 1 年目に獲得した知識や技術を定着させることが可能になった.

現在は北海道夕張市にて,自身の専門性を活かし,食べる・話す・笑うことを支援し,口腔の健康を通じて,地域住民の方々が人生を豊かに過ごせるように多職種と協同している.

【結論】

高齢化率の上昇や医療の高度化などにより歯科衛生士業務は多岐に渡る.それらに対応するためにキャリアアップが必要であるとともに,今後も医療福祉の変化に応じて学び続ける必要がある.

【引用文献】

1）内橋賢二：歯科衛生士の教育と将来，人と教育第 14 号：76－81,2020.

2）松山美和：歯科医師としての歯科衛生士教育とキャリアアップ支援，日補綴会誌　Ann Jpn Prosthodont Soc 6:285-290,2014